

2023年10月1日 主日礼拝

説教題「ただ一つの慰め」ローマ信徒への手紙 14 章 7～9 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしたちは生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(ローマ信徒への手紙14章8節)

先週から成人科に「ハイデルベルク信仰問答を学ぶ」クラスがスタートしました。「信仰問答(カテキズム)」は、聖書の信仰を学びやすく「問いと答え」の形にしたものです。「ハイデルベルク信仰問答」(1563年)は宗教改革期に誕生した最も美しい「信仰問答」と言われ、今も改革長老派教会などで用いられています。バプテストは「各人の自由」を尊重するので信仰問答を「教科書」にして学ぶことはしませんが、一人ひとりが聖書に深く親しむための「案内役」になるものです。

その「ハイデルベルク信仰問答」は次の問答から始まっています。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答 わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。

わたしの「慰め」は何でしょうか。特に「ただ一つの慰め」と尋ねられて何と答えますか。辞書では「慰め」は「悲しみや苦しみをまぎらわせてくれるもの。心を楽しませ、なごやかに静めてくれるもの」とありました。「子どもの笑顔に慰められる」「木々の新緑の美しさに慰められる」と言います。「自分で自分を慰める」はあまり良い意味では使われません。「慰め」を自分で作り出すことはできないからです。また私たちの周りには「偽りの慰め」があふれています。一時的に苦しみや悲しみから逃避させてくれるけれど、結果的に人を破滅に導く慰めです。ところが私たちは「偽りの慰め」と知りながらも、そういう「危険な慰め」をあえて求めるところがある。そこに人間の弱さを見ます。一人だけでは重荷を背負いきれない。何らかの支えに頼らないと一人では歩めない私たちなのです。そのような「偽りの慰め」を考える時、「ただ一つの慰め」＝「真実の慰め」とは、私たちの心を和やかにすると同時に困難に立ち向かう力を与えてくれるものだと言われます。

では、そのような私たちにとって何が「ただ一つの慰め」＝「真実の慰め」であるのか。この問いに対して「ハイデルベルク信仰問答」は「わたしがわたし自身のもではなく、真実の救い主イエス・キリストのものであることです」と答えています。これはちょっと意表を突く答えです。「慰めは何ですか」という問いには素直に「ただ一つの慰めは真の救い主イエス・キリストです」と答えればよいものをそうは答えていない。「わたしはわたし自身のもではなく、イエス・キリストのものである」とはどういうことなのか。「キリストのもの」とされる」ことが、どうして、わたしのただ一つの慰めと言えるのでしょうか。

福音書には、主イエスを通して「わたしはわたし自身のもの」という考え方から

解放されて「神さまのもの」として生きる、新しい命を見出した人たちが描れています。例えばザアカイは「自分をどう生きたらよいのか」悩み、もてあましていた人だったように思います。幼い時からのコンプレックス。そんな自分と周囲の人びとの間に生まれてきた壁や溝。富はあるけれど一緒に分かち合う友はいない。そのザアカイに主イエスは「あなたもアブラハムの子なのだ」と語られました。「『わたしはあなたを造ったゆえに、あなたを担い、背負い、救い出す』（イザヤ 46:4) という神さまの約束は、あなたのもの。あなたの命と人生は神さまのもの。安心して、あなた自身を生きていきなさい」と。そのときザアカイは自分の人生は「自分自身のもの」ではなく「神さまのもの」であること、愛の神さまにつながられて一緒に生きる喜びを知らされたのでした。

またゲラサの墓場で鎖につながれていた男もそうです。凶暴で自分さえ傷つける男のそばに誰も近寄りませんでした。主イエスが近づいた時にも男は言います。「近づくな。構うな」と。わたしなら「自己責任だ、これ以上は仕方ない」と思います。けれども主イエスは知っておられました。「近づくな、構うな」という叫びは本心ではなく、彼が背負ってきた深い悲しみと孤独が言わせている言葉であることを。そして彼を悪霊の支配の下から神の愛の下に連れ戻されたのです。「わたしはわたし自身のもの」。そうです。一人ひとりの人生の重荷はその人にしか負えないもの。他の誰もその重荷を代わって背負うことはできません。けれどもその「わたしの人生と重荷」に心を寄せて、「御自身のもの」として一緒に担い、救いを祈り続けてくださっている方がいる。「あなたの人生と重荷」を「わたしが背負い、担い、救い出す」と命をかけてくださっている方がいる。それは十字架のイエス・キリストです。「わたしは、わたし自身のものではなく、真実の救い主イエス・キリストのものとされている」。ここに聖書の告げる「ただ一つの真実の慰め」があるのです。

小説『ハンチバック』で芥川賞を受賞した市川沙央さんは、記念会見でこう語りました。「自分は怒りだけでこの作品を書きました。障がい者のための読書バリアフリーを訴え続けてきた声をスルーしてきた出版業界。同じくわたしの作品に見向きもしなかったライトノベル業界。その方々への怒りと復讐によって『ハンチバック』という作品は生まれました。でもこうして今、皆さまに囲まれていると、復讐は虚しいことが分かりました。わたしは愚かで浅はかだったと思います。怒りの作家から愛の作家になれるように、これから頑張っていきたいと思います」と。

この市川さんの言葉を聴きながら、あらためて私たちは一人では生きられない。自分の人生と重荷を、自分だけの力で背負って生きることはできない。分かち合う誰か、響き合う仲間を必要としていることを考えさせられます。ローマ書でパウロは語ります。「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」。私たち一人ひとりの十字架を最後まで担い生きてくださった方が、「あなたはわたしのもの」と今日も言い抜いてくださり、真実の同伴者として共に歩んでくださっている幸いを大切に受けたいのです。